

基礎基本を定着させ、もっと がんばろうという意欲につながる ドリル学習のあり方

岐阜県教諭 土屋 房枝

一 なぜドリル学習なのか

ドリルは家庭学習で使えるだけでなく、授業の最後のまとめでも有効に使うことができる。例えば計算ドリルは、教科書の練習問題だけでは足りない時に活用する機会も多い。もちろんやり方を確認しながら、答えあわせまで行う。授業でやるドリルはゼロ回目とし、算数の授業用のノートにやる。そしてその日の宿題として、同じページの一回目を今度ドリル用のノートに家で行わせる。授業と家庭の両方でドリルを有効に活用することで、基礎基本の定着が少しでもできればと願って実践している。さらに、努力の足跡がひと目でわかり、自分で家庭学習を進めていくきっかけになるがんばり表の活用も工夫している。



▲ 授業の中でゼロ回目のドリル学習に取り組む子どもたち

二 子どもたちの意欲を引き出す ドリル学習の見届けの必要性

「日常の見届けの流れ」

① 帰りの会に漢字ドリルと計算ドリルを2ページ分ずつ宿題に出す。

漢字ドリルは授業の内容より早めにやり、計算ドリルはなるべくその日に習った内容が復習できるページを出す。

学期ごとに2回ずつすべてやることを最低限の宿題とし、それ以上は自主的に進めていく。

② 子ども達は、朝登校したら、教師机にドリルのノートを出す。その日やったページに「がんばりチェックシート」(図2)もはさんでおく。

③ 担任が空いている時間の中で、ノートを見る。答えあわせまでやるのが宿題なので、正しくやれているか見届けて、「がんばりチェックシート」にシールを貼る。

④ やり方がちがっていたり、理解できていない子どもには休み時間などになるべく個別指導をする。

⑤ 係の子がノートを返す。

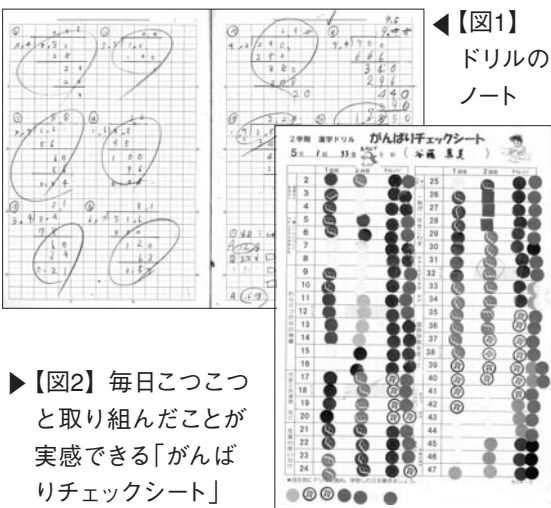
「宿題点検」

2週間に一度程度、会議などが無い5時間授業の日の六時間目に「宿題点検」日进行、一斉にどこまでドリル学習が進んでいるか、見届ける機会を設けている。このとき「がんばりチェックシート」があると、ひと

目で一人一人の取り組みの進み具合がわかるので、教師にとっては大変便利である。決められた範囲までできていない子は残って下校時刻までドリル学習をする。子どもたちにとっては「恐怖の居残り」であるが、この宿題点検を励みに頑張る子どもも少なくない。このとき居残りする場合には二通りの子どもがいる。一方は、理解できているが面倒くさがってなかなかやれない子。もう一方は、やりたくても問題が解けない子である。

以上のように、教師は毎日の見届けを大切にしなが、子どもたちが、自分で家庭学習を進めていこうとする意欲を育てていくことが大切であると感じている。ノート(図1)をしっかり見ることで、子どもたちがどこでつまづいているのか理解できるし、宿題点検を定期的に行うことで、学習習慣の身に付かない子へのはげましもできるのである。

◀【図1】 ドリルの ノート



▶【図2】毎日こつこつと取り組んだことが実感できる「がんばりチェックシート」

日々の授業で使う教材や教具。隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

三 漢字ドリル学習の落とし穴

「やった」「覚えられた」わけではない

子どもたちはしばしば、宿題の漢字ドリルを2回やれば、新出漢字が覚えられて、書けるようになるかと錯覚する。しかし、その後何回自主的に練習するかということでは習熟度に差が出るのである。

そこで、3回目、4回目の練習がいかにかに大切か実感できるよう、次のような試みをしている。単元ごとに、20問の確認テスト(図3)を行う。問題はドリルからそっくりそのまま出すので、がんばった分だけ、点数となつて結果が出る。問題が事前にわかっていることもあり、単元テストよりもこのドリルの漢字テストの方が出来が良い。20問と問題数も少ないので、漢字の苦手な子どもががんばって覚えようとする意欲が出て、その努力が点数となつて表れた時には、自信にもつながっている。

○単元テストの平均点…	約80点
○漢字ドリルの確かめテストの平均点…	約85点

さらに、必ず先に漢字ドリルの確かめテストをやつて、できなかった漢字を何回か練習してから単元テストを行っているので、単元テストの出来にもドリル学習の成果は出てると確信できる。



▲【図3】 定期的に行う20問テスト

四 「がんばりチェックシート」の更なる活用

自分の子どもはどこまで宿題をやれているのか、正確に把握していない保護者は意外と多い。そして高学年になると、子どもたちもあまりノートを見せたりしないようだ。そこで、個別懇談では、ドリルのノートと「がんばりチェックシート」を保護者に見せて、学習の仕方や理解の度合いについて話すきっかけにしている。また学級通信でも、ドリルの取り組みについて特集を組み(図4)、保護者にもこつこつと取り組み重要性を訴えている。

五 さらになる励みになるための活用

普段、学校が出す宿題はドリルだけではな



▲【図4】 家庭学習について特集した学級通信

い。プリントはしばしば使うが、このプリントの宿題をきちんとやってくるよう徹底するのに悩んでいた。子どもたちはドリルに比べて、プリントの宿題はおろそかにしてしまう傾向があったからである。そこで、プリントの宿題もやったかどうかをドリル「がんばりチェックシート」(図2)でわかるようにした。シートの下の空欄に、プリントを見せた分だけシールを貼るようになったのである。やってみると、励みになったようだった。このシールの数は成績の「関心・意欲」にも位置づけられている。3回目と欄外に貼つてあるシールの数で3段階に評価し、本人にも「やったね!」「この調子!」「もう少しがんばろう!」という3種類のシールを貼って学期末に返す。こうして本人にもわかるよう、国語と算数の「関心・意欲」の一部として評価した。